

新村出全集

第十二卷

筑摩書房

新村出全集第十二卷

昭和四十八年三月三十日 第一刷発行
昭和五十二年五月三十日 第二刷発行

著 者 新 村 出

担当編者 松 村 博 司

発行者 井 上 達 三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一一九一

電話 東京 〇七六五一(代表)

振替 東京六一四一二三番

印刷 多田印刷株式会社

製本 矢嶋製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

隨筆篇Ⅱ 目次

檀抄

自序 9

檀原 11 檀原の発音 15 南京の向日葵 16 南進雄図の回顧 22 木

炭隨筆 25 丹波太郎 33 星の名 37 冬の星 39 京都の冬 43 お

正月 45 初夢枕 49 二月三日日遅々 54 拍子木 56 上野の鐘 59

朴樹隨筆 61 朴の実 68 黒革茸 69 梅干 71 どくだみ 72 落の

臺 75 雑草の愛 77 ライラック 79 花はしどい 81 蚊帳ごしの花

嫁 84 鶯日記 88 鮎の思出 90 鴨川千鳥 94 四恩の感想 98 恩

師を懐ふ 102 夕煙 107 生垣の思出 111 私の郷里 117 姉の手紙 120

私の書齋 126 わが小庭 128 檀の生垣 132

跋語 134 再跋 138 再刷に際して 142

ちぎれ雲

自序 145

檀の実	147	雑草の花	152	晚香玉	155	貴船のあざみ	164	あわもり草	169
連翹の花	171	朴の興趣二題	174	朴を語る	176	樗茸のこと	181	新緑	182
無花果の新芽	183	浜防風	184	旗雲	185	星辰情趣	189	夏千鳥	191
五		百といふ数―「心の花」の五百号を祝して―	194	女性の言葉	197	絵更紗今昔			
観	201	巴里のゴブラン織	203	花槍	204	波斯詩を誦して堀井梁歩君を			
偲ぶ	206	護王神社社頭新曲陪聴記	209	京阪沿線とところどころ	212	京			
の水	217	洛中洛外の絵更紗屏風	221	奈良七重	223	関の藤川	232	数	
寄小考―貴志曉雪翁を追懷して―	239	轍の迹	245	顔を洗ふ―中川画伯の新隨筆―	251				
書物の題名―木下木太郎著『其国其俗記』を讀みて―	254	キトセンの『東北韃靼							
誌』	257	江南書興	258	近衛霞山公と森鷗外博士	267	足利学校訪書記			
―上田先生を懷ふ―	271	陽明文庫の話	277	停頓漫筆	285				

あけぼの

289

序	291	『鑑真和尚東征絵伝』清賞	294	黄金花咲く	298	飛鳥寺万葉歌碑除幕式	
祝歌 二首	301	橘のこと	302	和敬と大和	306	法隆寺 十七首	310
井		戸の若水	312	泉井の山吹 一首	316	此春と耐乏	317
		子歳の正月	319				
手まり唄	322	老いの初春 三首	326	松の話	327	東路花信風 十五首	334

草木を愛する心―柘榴を語る― 337 新芽譜 十首 340 大神楽 八首 342 橡
 の樹の歌 344 マロニエ 八首 346 道芝 348 連翹 五首 352 うばめが
 し 353 楓 九首 356 柿の実と小鳥 358 桂離宮拝観 三首 361 金閣寺
 五首 362 青木の実 364 ひともと柳 八首 367 野趣味 369 みづな 三
 首 371 浜防風 三首 372 山葵漬 五首 373 セロリイ 十一首 374 り
 んご 四首 376 椎茸・わらび 四首 377 琅玕餘材 378 更紗漫談 384
 苦楽二十年 387 色鍋島 389 花ざくろ 一首 390 偲びまつりて 391 野
 火止の平林寺に詣でて 395 九条武子夫人を偲ぶ 399 小夜しぐれ 二首 410
 わたつみの星 十首 411 おもひで 413 観劇 416 南座の顔見世 426 モ
 ーリスの思出 428 郷土を懷ふ 431 はまなの湖あたり 三首 434 はと
 やいばら 一首 435 臨濟寺にて 二首 436 ふるさとの道 一首 437 『関
 口黙齋先生伝』後語 438 『日本の言葉』序 440 やまとことばの防人 一
 首 442 『芭蕉図録』序 443 『新村出選集』第一卷序言 445 『朝霞隨筆』
 序文 447 「乗合船」小引 449 南蠻小舟 一首 451

童心録

小序 455

童心録 461

童心餘録 503

別篇並に単行本未載篇

- 哲老記 519 檀原宮の歌 530 共栄圈内の門松 534 和を以て先となす 539
- パンと老人 541 太平の曙光 542 五知先生 546 道友愛語 548 ニッポ
- ンかニホンか 551 新憲法随想 554 一老学者の杞憂 557 時 559 老人
- と女性 560 文化の秋 570 観光への反省 572 朝 574 慶祝日私見 576
- 老情無限 582 玉座を囲んで 584 風薫る京の大宮御所 587 佐渡の荒海 598
- 知恩院の鐘―藤堂祐範上人を懷ふ― 609 三喜考 611 水郷向島の想ひ出 616
- 新文学史跡雜感 618 瘦柿舎漫語 622 盆踊の讚 626 秋風漫筆―只向秋風
- 感慨多(放翁)― 630 蒼空 634 彼蒼 639 風流新語 644 花卉漫談 648 さ
- くらの思出さまざま 660 春雨餘情 662 蜜柑の花の香 665 『日本の美
- と教養』題言 667 春秋辯 669 小山居愛語 671 アカデミアの夢 676 愛
- 句日誌 678 白鳥讚美 682 「土」に寄す 685 詩の国の春 690 『山の燈
- 影』序文 692 『科学の森蔭』序文 694 『糟谷磯丸』序文 697 『日本晴』
- 序文 700 『星と伝説』序文 705 『井蛙語録』序文 707 『郷愁の長崎』
- 序 709 『鴨川』序文 710

解説

松村博司

新村出全集 第十二卷 隨筆篇Ⅱ

樞

抄

自 序

退休ののち余生を享くること既に数年、四恩を念ふ更に切なり。普天の下最も重き朝恩を申さむはいとも畏こし。生土に父母を懐ひ、王地に草木を愛し、悠々自適、読書に耽り筆硯に親しみつゝ、皇国の佳辰に会す。抃躍極る所を知らざるなり。

仰ぎては雲を看星を窺ひ、俯しては雜艸を撫し花卉を賞し、或はその名義を尋ね、或はその来由を探り、若夫れ時事に感じては、吳下の文化嶺南の古史に及び、一に皆興趣に乗じて漫録したるもの茲に若干篇を成し、今この慶典に方りて刊布するの運に遭へり。予の喜悅限りなし。

因みて書名に戴ける所の櫃の木は、予の夙に好尚措かざるの樹木にして、聖樹にして堅木、我が率土の浜に至るまで生育せざるなし。日向に大和に、畝傍に吉野に、熊野に天草に、古典歌集の明徴せるところ、風土記博物誌の顕彰せるところ、贅言を要せざるなり。父が故園、予が新屋、亦垣に周らずに処々之を以てし、奇技なしと雖も、壮時老境共に親しみ来つて讚美の情益々大なり。本邦の一農政家曾て櫃の十五能を称せしことあり。今一々抄記せざるも、舟車に、槍杆に、薪炭に、擊柝に、有用の材たること比類稀なりとなす。その常緑、その新芽、その枯葉、その果実、風趣と資益と相併せて叙すべきもの甚多かれども、書中未だ尽くす能はざりしを惜めり。同種の樹を亜欧の山野に求めて敢て得ざるにはあらず、種を異にし属を同じうせる所の遠西の榲樹亦これに髣髴たるの観あり、或は以て双絶とするに足らむも、予は櫃を挙げて杉と共に日本民族の精神を象徴せる名樹となさむと欲するなり。

芭蕉亦句あり、云く、「檣の木のはなにかまはぬすがたかな」。書名を選定せる縁因概ねかくの如し。体裁に關しては、諸友の厚情に負へること頗る多く、総て之を跋語に詳にせんとす。

昭和十五年十月四日

六十四回の誕生日を迎へて

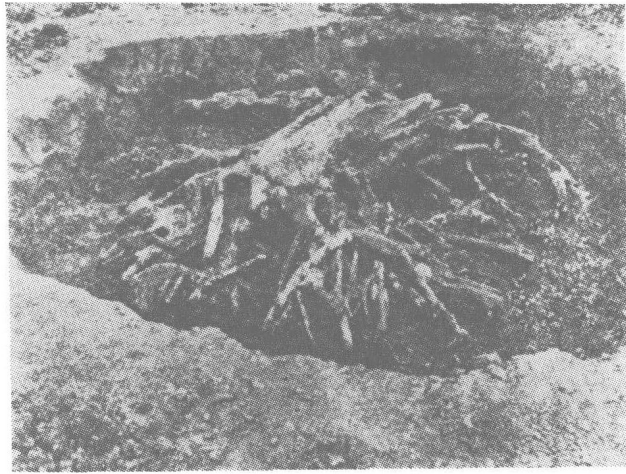
新 村 出

檀 原

七月下旬のことであつたが、檀原神宮の聖域の考古研究に身心を委ねてゐる末永さんからの話を伝へ聞くと、聖地の或る広大な部分から、イチヒガシの巨木の切株がおびたゞしく発掘されたといふことであつた。それは、檀原の称呼に関する私見の中に、かしこは元と檀の木のものであらうといふ、誰しも文字から首肯し得る考が出てゐたのに対して、裏書が出来るといふことを報じてくれた好意に外ならなかつた。程なく私は檀原神宮に参拝し、そのあと末永さんを尋ねて委しく聞きたいと思つて出かけた。それは七月二十八日のことであつた。日記の覚書に、

朝涼に乗り檀原神宮の参拝をおもひたち、十時十五分の急行の直通電車にのりて、一時間あまりにて到着。み橋、み柱、すべて新しければすがしく、又檜の木の香、馥郁としてありがたさ一入なり、ふしをがみて拝殿よりうかがふに、白き雞二羽神前にみえたるがいとめだちて見えたり、松の樹多し、参道の小並木には若檀を多く植ゑあり、社務所に入りて長尾禰宜に物問ひ尋ねなどせり、奈良県土木事務所の附近に出土品を備へ置ける小屋ある中に末永氏が勤すべしと聞きて訪ふ、不在なり、二時少し前の電車、おなじく直通急行にのりて三時に帰着。

半月後涼しい或夜、東京の親戚の一青年が伊勢参宮から檀原参拝をすませて、宅に來泊したのと歓談し、神域も今後何十年か経つたらば樹木鬱蒼と茂り一層神々しさを増すことであらう、紀元二千七百年のときの崇嚴さを想ひ



イチヒガシの古根株

やられる、いや、二千六百五十年が来たら、五十年前の今日を回顧しつつ、君ならば君の子孫に語り継がれるね、などとおめでたい話をしてゐる所へ、当の末永さんが初めておとづれて来られた。聞くと、神宮競技場、それを南から東へと半分ほど周つて過日私は末永さんを訪ねたのであつたが、その競技場を造営する工事中、巨大な樹木の切株を夥しく掘出したさうで、それを顕微鏡下に検照してイチヒガシなることを確め得たのみならず、その辺に落ち残つてゐた実も亦イチヒガシのものであつた、といふことである。それら多くの切株の上には、人工に踏み均らした土の層が存し、その土中から亦幾多の土器が発掘されたといふ話である。イチヒガシの切株は写真にもしてあり、実物も残してあるから、その中に見せてあげませう、と末永さんは言はれた。

イチヒガシは上世は赤檣ともかき、『古事記』には「景行天皇の巻」に日本武尊がその木材を以て作つた木刀を出雲建の佩刀とすりかへておかれて、此の酋長を誅伐なされた話が伝はつてゐる。地名としては、『古事記』応神天皇条の蟹の長歌にみえる所の伊知比韋は、「允恭紀」七年の櫟井とおなじく、イチヒ檣に因んだ地名であらう。これから推測すると、イチヒ檣が上古から注目され利用されたことが良くわかる。但しイチヒに櫟といふ漢字をあてはめたのは、奈良朝以来の誤用であつて、『和名抄』や『延喜式』などがさうで



イ チ ヒ ガ シ

ある。従つて『常陸風土記』の行方郡の物産名や『出雲風土記』大原郡の物産名なる櫟もイチヒと訓ませてよいのであらう。『万葉集』の巻十六の三八二四の歌には、地名の櫟津をイチヒツと訓ませてある。同卷三八八五の鹿のために作つたといふ長歌には、平群の山の「片山に二つ立つ伊智比が本」といふ文句があるが、平群の山は、『古事記』の「景行天皇卷」にみえる日本武尊の御歌と、「雄略天皇の卷」の御製とに由つて、クマガシで名高い。白井博士に従ふと、このクマガシはツクバネガシ *Quercus sessilifolia* であらうとのことである。遺著『樹木和名考』に説がある。イチヒガシは *Quercus gilva*. 多少の相違はあるが共に常緑木である。

イチヒガシは、『和名抄』『菓部』に出てゐるが如く、古来果実として食用に供せられてゐた。一本の『宇津保物語』『俊蔭の巻』にも、京の北山あたりに、椎の実や栗や櫟の実などと共に、いちひの実を拾ふ話が出てゐる。松の尾の慶政上人の『閑居友』下巻、「津の国の山中の尼の発心の事」といふ話の中に、「いちひがしの実をなんとりきてくひものにはてうじける」とみえてゐる。謡曲の「通小町」に、「拾ふ菓は何々ぞ」とあつて、それから、「いちひ、かしひ、まてばしひ」とあげてあるが、いちひがしといふのを、イチヒとカシヒ（香椎）との二つに分けて考へたのは例の語源俗解に外ならぬ。「通小町」のも、やはり洛北のことであつた。

『延喜式』の「内匠寮式」をみると、腰車や牛車の輪に櫟材を用ゐた由がわかる。武家時代になると、イチヒガシの棒を使つたことが、屢々見えてくる。日本武尊の時代を想起させる。『義経記』卷三、書写山炎上の条に、辨慶が「イ

チヒの木を以て削りたる棒の八角に稜かどを立て、本を一尺ばかりまろくしたるを引杖にして高下駄をはいて御堂の前にぞ出で来る」といふ勇ましい話もあり、同卷四、住吉大物二ヶ所合戦の条にも、イチヒの木の棒の一丈二尺あるを小脇にはさんで小舟のへさきに飛び乗る壮快な話があらはれてくる。この条にはイチヒのことが数ヶ所に出てゐる。『太平記』卷十七、卷二十九、あちこちに散見する榧の棒も或はイチヒの木材だとしてもさしつかへあるまいかと思ふ。

イチヒガシには、かういふ武勇談や、あゝいふ代用食の逸話がつきまとふのである。前に書きもらしたが、山城あたりの市原野などの名も、イチヒ原野に出づるものであらう。即ち洛北には、昔し名高いイチヒガシの茂つた野原があつたと見るべきかと思ふ。

(昭和十五年八月、新稿)